

会長選挙の実施について

本会の細則第13条に基づき、社員（代議員）による会長選挙が行われます。同細則第6項に従い、候補者2方の紹介記事を掲載いたします。この投票の結果により12月理事会において次期（2025～2026年度）会長が内定します。

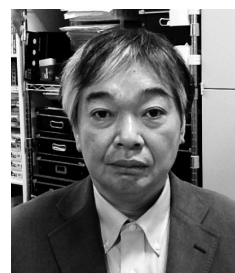
役員等候補者推薦委員会

次期会長候補者の紹介

(1)生年月日, (2)所属・職位, (3)略歴, (4)専門分野, (5)本会役員・委員の履歴, (6)会長候補者としての考え。Sは昭和, Hは平成, Rは令和(50音順)。

平山 直紀(ひらやま なおき)

(1)S38年7月25日, (2)東邦大学理学部教授, (3)H5年京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了, 博士(理学), 同年JSPS特別研究員, 同年金沢大学理学部助手, H14年金沢大学理学部助教授, H20年金沢大学理工研究域物質化学系准教授, H22年現職(R2年～副学部長), (4)分離化学, 溶液化学, (5)理事(H23～24年度), 筆頭副会長(R5年度～現在), 第68年会(R元年)・第73年会(R6年)実行副委員長, 「分析化学」編集委員(H17～18年度), Anal. Sci.編集委員(H21～28年度), 同副委員長(H23～25年度), 「展望とトピックス」副委員長(H28～R元年度), 同委員長(R2年度～現在), Confit小委員会委員(R5年度～現在), 中部支部幹事, 常任幹事, 関東支部常任幹事, 副支部長(R3年度～現在), (6)思いがけず副会長を拝命し, さらに今回会長候補に推薦されるに至り, いささか面映ゆい思いがあります。大谷前会長のご逝去後, 山本会長の下で筆頭副会長として学会の活性化に向けて様々な努力をしてきました。現在, 津越副会長を中心にさらなる方策を検討中であり, 今後もそれを推し進めていきたいと考えています。略歴にあるように「副」の多い裏方人生を歩んでおり, 綺麗事では物事が動かないことも承知しています。しかし, 編集委員や「展望とトピックス」など, 分析化学全体を観る機会に恵まれたこともあり, 分析化学を愛する気持ちには自信があります。年会や討論会が活況を呈しているのに会員は年々減少しています。毎年, 学生さんを含め多くの新入会員をお迎えしていますが, それ以上の退会者を出しているのが現状であり, 一度ご縁があった会員を逃さない学会作りが肝要です。現在, 領域を網羅する大きな学会から専門に特化した小さな研究会まで実に多くの学術団体がありますが, 在籍し続ける団体の一つとして本会を選んで頂くためには, 分析化学という分野を包括的に知る魅力を発信していくことが重要と考えます。また, 企業に在籍する会員にとっても有益な情報収集, 人脈構築の場となりうる学会構築も必須と感じています。さらには, 若手・中堅の会員が本会の本部・支部の各種委員を引き受けることに意義を見いだして頂けるようになれば, 本会全体の活性化に繋がると考え, そのための方策を検討していきます。



山本 博之(やまもと ひろゆき)

(1)S34年12月28日, (2)量子科学技術研究開発機構高崎量子技術基盤研究所・副所長, (3)S63年東京理科大学大学院理学研究科博士課程修了, 理学博士, 同年日本原子力研究所研究員, H17年日本原子力研究開発機構研究主幹, H28年量子科学技術研究開発機構に転籍, 現職, (4)電子分光分析, 表面分析, (5)関東支部常任幹事, 副支部長(H31～R2年度), 支部長(R3年度), 参与(R4年度～); Anal.Sci.編集委員(H21～25年度), X線分析研究懇談会運営委員(R2年度～); 第82回分析化学討論会実行委員長(R4年度); 理事(R3年度～), 筆頭副会長(R5年度), 会長(R5年度～), (6)大谷前会長の任期半ばでのご逝去に伴い急遽会長を拝命して以降, 困難な学会財政基盤の中, これまでの会長諸先生方の考えを継承しつつ, 学会を取り巻く問題に対応してまいりました。同時に, 入退会の自由である学会においては, 問題点の解決のみでは学会をプラスの方向にもたらしることが難しいようにも感じています。厳しい状況の中にあっても夢を語り, 皆さまとともに未来を展望することが必要と思います。そのような思いから, 学会では現在, 「未来戦略構想(JSAC2024)」として, 学会の将来に向けた議論を始めています。これらの中には会員資格の在り方や合理的で手間のかからない学会運営事項の見直し, 団体会員の方々も含めたより幅広い人材の運営への参画など, 学会内の基盤をより安定化したものとするこ



とともに、学会の認知度向上や活動の理解促進を目指した広報など学会外に向け「分析」の重要性を訴え、皆さまの活動をより広くアピールすることなどなど、それぞれの会員の皆さまの考える未来に向けた提案が凝集されるものと思います。これらを調和させ、時代の変化を見つめながら着実に実現させてゆくことが次なる仕事となります。21世紀もいつの間にか第一四半期を終えようとしています。第二四半期、21世紀半ばあたりを見通し、今の学生諸子や就職されたばかりの会員各位が壮年期を迎え、学会をけん引していただける頃に充実した学会となっていることを念頭にしつつも、まずは足元を整備することが必要です。各支部、研究懇談会、個々の会員の皆さまそれぞれのお声を伺う機会を大切に、未来に向けて一緒に歩むことができればうれしい限りです。

日本分析化学会の機関月刊誌『ぶんせき』の再録集 vol. 3 が出版されました！ 初学者必見！ 質量分析・同位体分析の基礎が詰まった 293 ページです。

本書は書籍化の第三弾として、「入門講座」から、質量分析・同位体分析の基礎となる記事、合計 42 本を再録しました。『ぶんせき』では、分析化学の初学者から専門家まで幅広い会員に向けて、多くの有用な情報を提供し続けています。これまで掲載された記事には、分析化学諸分野の入門的な概説や分析操作の基礎といった、いつの時代でも必要となる手ほどきや現役の研究者・技術者の実体験など、分析のノウハウが詰まっています。

〈2003 年掲載 1 章 質量分析の基礎知識〉

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 1. 総論 | 7. 無機材料の質量分析 |
| 2. 装置 | 8. 生体高分子の質量分析 |
| 3. 無機物質のイオン化法 | 9. 医学、薬学分野における質量分析法 |
| 4. 有機化合物のイオン化法 | 10. 食品分野における質量分析法 |
| 5. ハイフェネーテッド質量分析 I | 11. 薬毒物検査、鑑識分野における質量分析法 |
| 6. タンデムマススペクトロメトリー | 12. 環境化学分野における質量分析法 |

〈2009 年掲載 2 章 質量分析装置のためのイオン化法〉

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 1. 総論 | 7. レーザー脱離イオン化 |
| 2. GC/MS のためのイオン化法 | 8. イオン付着質量分析 |
| 3. エレクトロスプレーイオン化—原理編— | 9. リアルタイム直接質量分析 |
| 4. エレクトロスプレーイオン化—応用編— | 10. 誘導結合プラズマによるイオン化 |
| 5. 大気圧化学イオン化 | 11. スタティック SIMS |
| 6. 大気圧光イオン化 | 12. 次世代を担う新たなイオン化法 |

〈2002 年掲載 3 章 同位体比分析〉

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 同位体比の定義と標準 | 4. 同位体比を測るための分析法 |
| 2. 同位体比測定の精度と確度 | 5. 生元素の同位体比と環境化学 |
| 3. 同位体比を測るための前処理 | 6. 重元素の同位体比 |

〈2016 年掲載 4 章 精密同位体分析〉

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 同位体分析の基本的原理 | 8. 小型加速器質量分析装置の進歩と環境・地球化学研究への応用 |
| 2. 表面電離型質量分析計の原理 | 9. 二次イオン質量分析装置の原理 |
| 3. 表面電離型質量分析計の特性とその応用 | 10. 二次イオン質量分析計を用いた高精度局所同位体比分析手法の開発と応用 |
| 4. ICP 質量分析法による高精度同位体分析の測定原理 | 11. 精密同位体分析のための標準物質 |
| 5. マルチコレクター ICP 質量分析装置による金属安定同位体分析 | 12. 質量分析を用いた化合物同定における同位体情報の活用 |
| 6. 加速器質量分析装置の原理 | |
| 7. 加速器質量分析の応用 | |

なお『ぶんせき』掲載時から古いものでは 20 年が経過しており、執筆者の所属も含め現在の状況とは異なる内容を含む記事もありますが、『ぶんせき』掲載年を明記することで再録にともなう本文改稿を割愛しました。これらの点については、執筆者および読者の方々にご了承いただきたく、お願い申し上げます。